

巻頭言

認知研究のアカデミズム

服部 雅史

2018年度の日本認知科学会（以下、JCSS）第35回大会は、8月30日（木）～9月1日（土）に、立命館大学大阪いばらきキャンパス（大阪府茨木市）で開催することになった。大阪いばらきキャンパス（通称 OIC）は、「総合心理学部」（2016年開設）と「大学院人間科学研究科」（2018年開設予定）を含む3学部4研究科から構成される。敷地面積で日本最大(!)といわれる心理学実験施設もある。ぜひとも、地域連携を志向した新しい都市型キャンパスを訪れて、施設も見学していただければ幸いである。

今大会のテーマは、「認知研究の対話と展開」である。最大の特徴は、日本認知心理学会（以下、JSCP）第16回大会（9月1日～2日）との共同開催である。これは、いくつかの幸運が重なったおかげで実現が可能となった。共同開催というのは、別々の大会ながら会期の一部を重ねて同じ場所で開催し、相互乗り入れを可能にするということである。大会最終日の9月1日は、JCSS・JSCP 合同企画を複数予定している。それとは別に、会期中に新大学院開設記念行事も企画している。多数の方にご参加いただければと思う。

さらに、大会に参加される JCSS 会員の方は、どうか滞在を1日延ばして、9月2日の JSCP 大会にも出席してほしい。特に、これまで JSCP という学会との接点がありませんでした方が、この機会に新しい人々や隣接学問領域のアプローチに触れて研究交流する中で、何か生まれるきっかけになればと願う。さらに、両学会でアクティブに活動してきた人にとっても新鮮な研究交流機会として、Psychonomic Society Collaborative Symposium を宣伝しておきたい。このシンポジウムは、JSCP と Psychonomic Society（米国最大の実験心理学系学会）の協力で、9月2日に同じ会場で開催される予定である。

JCSS と JSCP は、近いようで遠いのか、遠いようで近いのか。会員の重なり具合はどのようなだろうか。共同開催のアイデアを模索していた頃に何人かの会員と話をしたら、「両学会で活動している人は意外に少ない」と評する人がいた一方で、「両学会に入っている人は多い」という人もいた。実は、今大会のような試みは初めてではない。古くからの会員なら記憶にあると思うが、12年前（2006年）の第23回大会は、キャンパスは少し離れていたものと同じ中京大学で第4回 JSCP 大会と共同開催された。また、たとえば JSCP の独創賞に JCSS が協賛しているといった協力体制も維持している。しかし、個人的印象としては、両学会の雰囲気や会員の考え方は結構「違う」気がする。

12年前の JCSS・JSCP 大会共同開催にあたって、やはり巻頭言（第13号3巻）で太田信夫先生（JSCP 前理事長）が「異分野交流」の意義を述べている。そう、「異分野交流」こそが JCSS のモットーだと私は思っているので、それを推進するような大会にしたい。どんな大会になるかではなく、どんな大会に「する」かを考えなければならぬ。歳になってきた自分には愕然とするが、古株の会員にとって居心地のよいだけの学会に将来はない。すべてが新しい若者にとって、おそらく異分野の垣根はそれほど高くないし、交流の意義も大きい。だから、そういう若手研究者の研究交流を促進したいという思いを

込めて、参加費を大きく優遇することにした。これも今大会のウリの一つである。学部生の参加費は無料(!)とし、大学院生(学生会員)は、JCSS大会参加費と同額でJCSSとJSCP両大会に参加できることとした(一般会員は割引)。

認知科学という学問分野の誕生から60年あまりが過ぎた。行動主義に反目して情報処理の概念を中心におくことからスタートし、その後、状況論や進化論といった新しい概念や多様な方法論を貪欲に取り込みながら、これまで認知科学は豊かに拡張してきた。いま、認知科学を構成する学問分野の社会的重要度が増している。人工知能は第3次AIブームに沸いている。ディープラーニングの技術は、最強のプロ囲碁棋士を超えてさらなる高みへと自ら駆け上るAIを実現したと聞く。また、シンギュラリティやAI失業など、社会を賑わす話題にも事欠かない。

心理学も、また別の意味で社会的関心を集めている。2017年9月に公認心理師法が施行され、心理学に携わる者の悲願だった心理学の国家資格が実現することになった。今後、社会が心理学に求めるものが拡大・変容していくことは間違いない。それは、わが国の高等教育における心理学のカリキュラムだけではなく、心理学研究の動向にも少なからず影響を与えるだろう。

そんな中で私が改めて訴えたいのは、認知科学の基礎研究への回帰である。いまディープラーニングで実現されている技術的成果は確かに革新的であるが、理論的にはどうか。1980年代のPDPの革新性と比べてどうなのであろうか。社会連携研究や心理臨床実践は、社会貢献の観点からもきわめて重要であるが、地道な基礎研究の成果という雨が降るからこそ、本当に有益な社会貢献の大河が維持できるのではないか。ノーベル医学生理学賞受賞者、大隅良典氏の「役に立たない研究しよう」ということばには勇気づけられる。そう、勇気を出して言おう。技術(だけ)ではなく科学を、実践(だけ)ではなく理論を、と。

基礎研究の命は理論である。しかし、自戒を込めて言うと、日本発の認知研究で理論的インパクトのあるものは少ない。理論のない研究は根のない草で、すぐに枯れる。理論のないところに学問の発展はない。そして、哲学のないところに理論はない。哲学が理論を生むわけではないが、優れた理論家には哲学がある。最近の大会で、私が少し残念に思っているのは、以前はときどきあった怪しげな哲学的な議論(あるいは意味不明の発表!?)をあまり聞かなくなったことである。哲学畑の研究者も学会であまり見かけることがなくなったように思う。

異分野交流。そう、この機会に、第35回大会では、認知研究の来し方行く末を考えて、参加者一人ひとりが哲学してみるというのはどうだろうか。きっと、まだ茹だるように暑い大阪で、それに負けにくいくらい熱い議論をかわしてみるのは、